

「Extended (or Cambodian) Mahāvamsa」訳註(五)

福田孝雄

カーラーソーカ¹⁴⁽¹⁾ (Kajāsoka) 王の息子等は十人兄弟であ
って、(その名は) バッタセーナ (Bhaddasena) とコーラ
ンダワンナ (Korandavaṇṇa) とマンカ (Anka) とサッバ
ジャハ (Sabbajaha) とジャーティカ (Jatika) とサンジャ
ヤ (Sanjaya) とウヅカ (Ubhaka) とかくの如くであり、
コーラビヤ (Korabya) とナンディー (Nandi) と第十番目
はバンドゥナ (Bhaṇḍuna) とであり、¹⁶ 彼等は二十二年の間
王国を統治した。⁽²⁾ 時に、一人大賊が多数の朋友と徒党を組ん
で、盗みの行為をなした。¹⁸ ある村で奪って多量の財を取って
その村の人達にその財貨を運ばせて、¹⁹⁽³⁾ 自分の村に到って、そ
れら凡てを分配するのだった。伝えによると母と父を養う勇
敢で剛毅で智慧のある一人の男子が、その小村に住んでいた
が、²⁰ その父の死後は彼は母の世話をするのであった。賊たち
は村で掠奪しては多くの財を取って、²¹ 母を養う人に財を取ら
しめるのだった。そこで彼は全盗賊に問うた。「師等よ今日

如何なる行為をあなたたちは、²² 彼等と共にどのようになした
のですか」と、(盗賊たちは)「君、奴僕よ、我等は他の行為
を為すことはない。それ等農業とか牧畜など全然考えてもい
ない。我等はこのような行為を(為して)多くの財を取り、²⁴
日々飲み食べることが可能であり、また息子たちや孫たちや
娘たちを養育している」と。²⁵⁽⁴⁾ 彼は(その言葉を)聞いて賛同
し、再三再四乞い求めて「若し今日可能ならば、何卒私を朋
友として連れて行って下さい」と言ったところ、⁽⁵⁾ 彼等賊た
ちは(その)言葉に応諾し「宜しい」と言った。その人は自
らの村に行くことを欲しなかったが、²⁷ 彼等賊たちと行動し、
掠奪の行為を行った。他日に賊たちは行って掠奪し、²⁸ ある大
村で多量の財貨を奪い去った。その村には多数の勇敢なる人
々が住んでおり、²⁹ 武器を執って彼等と戦いを為した。凡ての
賊たちは敗北して四方に逃走したが、³⁰ 彼等(村人たちは)最
も年老いた賊を捕えて直ちに首を切断した。⁽⁷⁾ 彼等賊たちは集

まって自分たちの村に行つて、そこにとどまって嘆き、悲泣し、憶いながらこう言うのであった。「我れくのうちには彼と同じように掠奪を行う際に、指導者として巧みなるものは誰もいない。あゝ実にいないのだ」と。母を養っているその人はそれを聞いてこう言った。「あなたたちはそう嘆かないともよい。私があなたたちの集団の指導者となることができるだろう」と。凡ての賊たちは彼の言葉に同意し、直ちにその人を村の指導者に据えた。彼が掠奪を行つて、喜び「私はナンダ(Nanda)である。私はナンダである」と自分の名を告げた。次々に、この勇敢で戦いに長じた人は村に侵入していったが、誰も彼に勝つことができなかった。多くの集団が彼と共に掠奪を(行うのであった)。ところである日(彼は)凡てのものに呼び掛けて訓誡した。「我が朋友諸君よ、我れく勇者たるものは、このような邪悪なる行為を何人たりとも為すべきではない。我れく凡てのものにとつてこのようなことは相応しくない。故に何を(為すべきか)。我れくは王権を手に入れよう」と。凡てのものたちはそれを聞いて歓喜して「それは善い」と同意した。かのナンダは種々なる武器を準備し、従者をしたがえある小都市を包囲させた。その時、人々は強き軍勢と戦つて戦場に倒し、更に都城の内に侵入し戦い、内部の(人々と)共にその国王を殺害した。残余の僅かの都市の人々を強いてそこから連れ出して、

ジャンブディーパの人々を彼は支配下に置くと共に、次第に人々と友人として親交を為すに到つた。(彼は)象や馬や戦車などの軍隊を伴つて行つて、パータリプッタ(Pataliputta)を包囲し、人々と戦いを交えた。外部から凡ての都城の之々を種々に殺戮し、後にそこに近づいていった。その時人々はカーラーソーカの息子を殺害した。パータリプッタ市においてナンダは王族となり、来集せる凡ての人々は王の灌頂を行つた。(彼は)その統治を行つたが、それから間もなく死んだ。彼の死後最も年若な兄弟たちがいたが、一人はウツガセーナナンダ(Ugassenananda)であり、(次は)カナナンダ(Kanananda)と称し、更にチャンダグッティカナンダ(Candaguttikananda)とブータパーラナンダ(Bhūtapalananda)とラッタパーラナンダ(Ratīhapalananda)とゴービスアーナカナンダカ(Govisāṅkananda)とダサシッディカナンダ(Dasasiddhikananda)とケーワッタナンダカ(Kevattanandaka)と、このように順々に八人の王族の人々が、パータリプッタ市において王国を統治した。その後それら凡ての(王のうち)最も若い第九番目のダナンダ(Dhanananda)は二十二年間王国を統治した。かの王は極めて多くの財を我がものとなし、また自ら財を蔵置する方法を遍ねく捜し求めガンガーを破壊させて二本の水路を構築させて、水を乾上がらせ、その時に軍隊をもつてガンガー

きなさい」と言った。その時(バラモンは)怒りを発し供儀の糸を切断し、帝柱に水がめを破って「彼に繁栄は有ること勿れ」とバラモンは呪った。大臣はその言葉を聞いてかの(王に)言った。(王は)怒って「我が奴隷を捕えよ」と命じた。バラモンは急いで裸の装いで行って、許しを得ずにそこより出て行った。それから(装いを)捨てて、ある塵の堆積せる所に隠れた。大臣は(彼を)見つけることができずに再び戻って(王に)告げた。その夜に彼は行って他の場所に隠れた。⁸⁶ところでかの王のパッタ(Pabbata)王子と称する息子があり、王子の随侍達を早朝に観察して、彼等と種々に親交を結んだ。彼等同志となった者達は、王子を見て喜び、⁸⁸王国を手中にして彼を王位に就けるべく説得した。直ちに外に出る方法を探しつつ、⁸⁹彼は地下道に通じる地下道の戸があることを知ったが、その時は合せ目は閉じていた。王子と語り母の下にやって類似の機関の指環を乞わしめた。直ちに(戸を)⁹¹開いて王子と二人で地下道から抜け出した。一緒に逃げて彼はウィンジャータウィ(Vinjhatavi)と言う森⁹²に行つてそこに住み、必需品を捜し求め、八億カハーパナの量の財富を自らの才覚によつて作り、その場所に貯蔵した。しかし智慧の少ない王子を疑つて、彼はそれより白き傘蓋に相応しい智慧を具えた他の者を捜し求めた。

その時は我れくの大師は涅槃に入り給うことはなかつ

た。⁹⁵⁽²²⁾多数のサーキヤ(Sākya)族の王達は友を裏切る者達により語られたような方法により殺戮された。他の残りの者達は、ヒマラヤ(Himavanta)地方に入り或る日蔭と水との有る美しき場所を見て、そこに煉瓦に覆われた殿堂の群立する富み繁栄し心になつた都城を建設したと言う。孔雀(ma-yūra)の頸に類似せる善く区分された大道と、門屋や牆を周囲にめぐらした(家々があり)、常に孔雀や白鷺の鳴き声が市中に(満ち)、それによりモーリヤ(Moriya)市として一般に知られていた。¹⁰⁰その時サーキヤ族の王達は、その高貴なモーリヤ市において息子や孫達と共に政治を執らせていた。¹⁰¹⁽²³⁾ジャンブディーパの凡ての人々は、モーラ(Mora孔雀)王によつて名づけられた。以前一人のモーラ王が、近隣の王により殺害されたと言う。その時彼の妃は懐妊していたが逃れてプッパプラ(Pupphapura)と言う都城において息子を出産したが、鍋¹⁰³に寝かせて自ら連れて行き、ある牛舎の戸のところ¹⁰⁴に置いたが、早朝牛の群を連れて来て出て行き踏みつけつつあつた時に、まさに死に到らんとする一人の子供をチャンダ(Canda)という牛王が見て、彼の福の威力によりいでてその上に立った。早朝、牛飼いは起きた時に、その息子を見て、¹⁰⁶そこに行き、彼は(その息子を)連れ帰り家で養育した。かのチャンダ牛王により護られていたために、息子¹⁰⁷にかの牛飼いはチャンダグッタ(Candagutta)と言う名をつけ

た。(彼が) 犢牛を護ることの出来る年齢に達した時に牧牛¹⁰⁸者の友人である一人の獵師の息子は、その子供を見て愛情がわき、乞うて(牛飼いの)ところから、彼の自らの家に連れてきて住まわせた。その後かのチャンドグッタ王子がある日犢牛を護っている時、子供達が一緒に出て来た。そして牛飼いの子供達は(彼を)見て、それからは(自分達の)指導者にした。かの王子は王の遊戯と称する遊戯をして遊んでいたが、牛飼いの子供達を將軍とか大臣とかにし、副王などの職掌を司らせ、自らは彼等の真中に王族として坐すのであった。彼等の会合に賊達が連れて来られた時には、司法官が罪を決するのであった。彼は大臣達を呼び、そのような言葉で命令した。「汝等よ、賊等の手足を切断せよ」と。その者達が「王よ、斧が有りません」と言うと、羊角によって斧を作り、斧の刃をもつて、彼は大臣達に与えた。大臣達はそれを取ってこのように言った。「確かにこの斧はチャンドグッタ王により我れくゝに与えられた。ここに彼等の手足を切断した」と、その語と共に凡ての面前で鋭き斧によって彼等は(手足を)切断した。チャンドグッタはそれ等の手足を見て「汝等、接合せよ、接合せよ」と命じたところ、それ等は元のように接合した。チャーナツカバラモンはその後次第にその地に行つて、そこでその時の凡ての不可思議なることを見て、チャンドグッタに呼びかけ、その家を示させて行つて、

獵師に彼は一千カハーパナを与えて乞うて、かのチャンドをこれから指導するために連れて行き、彼はその王子を指導し学ばせた。彼はパツパタ王子と一緒に住まわせて、毛糸で作った十萬金に価する黄金の带状飾りを、二人の間を思察し彼はチャンドグッタの頸に飾り、そのようにパツパタ王子の(頸に)飾った。彼等二人の王子達は夢を見て、バラモンに(それを)語った。バラモンはそれを聞いて「この王子は智慧が足りない、しかしチャンドグッタは智慧があり、遠からずジャンブディーパで最上の王となるであろう」と知るのであった。彼はしかし、そこで夢については何事も語らなかつた。この三人は或る日歩き廻つて、日中の暑さのためジャングルに入り休息し眠りに入った。(彼等の)師は目を醒して二人の間を審察せんとして、先ずパツパタ王子を起して、耳に手をあてて、バラモンは彼に(次のように)求めた。「静かに静かに行つて(チャンドグッタ)王子の頸の毛糸を切らず解かず私のところに持つて来なさい。その間汝は目を醒してはいけない」と。彼は方法を搜したが得ることなくして戻つて来た。か(のバラモン)は翌日同じようにチャンドグッタに命じた。(チャンドグッタは)「私は切らず解かずして得ることは出来ない。今日は彼の頸を切断するであろう」と切断した。彼の頸を切断して毛糸を得てバラモンに与えた。(これを)見て彼は何事も言わなかつた。

かのチャンダグッタが次第に成長しつつあった時に、バラモンが自ら貯蓄する全カハーパナを王子に取らせて与えた。多くの国の人々を取って軍勢は地方に行つて、凡ての境域において碎破し、多くの人々を殺害せしめた。その時かの人々は地方よりいでて戦いをなし、軍隊を取り囲み散々に殺戮した。軍隊は敗北し遍ねく逃走した。戻ること不可能な敗北せる軍の二人は広大な森林に逃走し、戦うための方法も見出せなかった。彼等は太陽の没したる時にある村に入り、村人の会話を聞きながら歩き廻っていた。その村で、一人の婦人がパンケーキを焼いて、その息子に与えたと、彼はその端を食べず、真中のみを食べてすぐ吐いてしまった。そして熱いので泣いて、「お母さん、私に他のを下さい」。母は(それを)聞いて叱責して「お前は愚かな息子で、順々に食はず、真中だけを食べる。チャンダグッタ王子は最上の王国を希求しつつあるが、次第々々に外部の村や町を碎破すべきであるが。今日彼は地方の中心に自らの軍隊をもって侵入し多数の人々を取って殺害せしめた。多数の人々が一致して直ぐに取り囲み軍隊と戦い諸方に放逐してしまった」。二人はその村で婦人の言葉を聞いて、その方法を了知して、自らの安全を審察して決定し、多くの人々を辺境の村や町に引き寄せて好むままに碎破して、順次に戦つて多くの人々を殺戮せしめた。日々地方に侵入して戦い、パターリプッタ (Patalipu-

tra) 市の中に侵入し、ダナンダ王と戦いを交え、その時人々は自軍他軍入り混じつて相互に殺害した。そして遂に戦場でダナンダ国王を倒した。か(のチャーナッカ)はチャンダグッタ王子を灌頂せず一人の漁夫を呼び、ダナンダにより蔵置された(財)を知つて、その時(漁夫を)唆してその場所を示させた。かのバラモンは彼と共に行って、ガンガを破壊させ、中心(にある)財宝を手に入れて二ヵ月を過ぎた。か(のバラモン)は漁夫を殺させて太鼓を鳴らさせ、凡ての黄金を人々に分配した。そして(チャンダグッタを)全ジャンブディーパの王として灌頂した。王は二十四年間パターリプッタ市において、人々に賛えられて統治をなさしめた。彼はバラモンを大行政官の(位地)に据えて市を市の人々と共に守らしめた。今この地方を他の王達から取ることはできないが、しかし征服により得ると彼は考察した。「毒薬の混合の行為によりチャンダグッタ王に障碍があつてはならない」とかのバラモンは考えつつ、彼は毒薬を得て一つを煮て、一部微量を取つて菓子に混入した。この菓子を他の王達に与えず、とどめた。彼はある日言われた方法により用意して、小給仕者をやつて自らは後から行った。王が食事を食べて鉢から手を離れた時、か(の給仕者)は、(バラモンが)まだ到着しなかつた時に王にその菓子を与えた。叔父の娘が王の妃であったが、月満ちて七日が経過した時、息子を出産

する彼女に王は菓子を与えた。そこに到達したバラモンは、¹⁶⁵ 妃が口に（その菓子を）含み食べんとしているのを見て、胎内の子が死でしまうことを知って、直ぐに刀を取って彼女の頸を切断し毒をくい止めた。（彼は¹⁶⁷）妃の左横腹を引き裂き、胎盤と共に胎児を取り出し直ちに一頭の牝山羊の胎に入れ、縫って薬をつけた。七日が過ぎて、その胎児が生長した時に得させて、乳母を与えて養育せしめた。王子の身体に血の点滴が認められたので、そのためにヴィンドサーラ（Vin-¹⁷⁰ dusāra）と称されるに到ったと言う。病気に悩まされたチャンドグッタ王は二十四年が過ぎて死に到った。¹⁷¹

大威力あるデーワガッバ（Devagabha）と称する一夜叉⁽²⁹⁾が、その後自らの夜叉の威力によって（チャンドグッタ）の身体を支配した。日々自らを装身具によって荘厳し、王と同じ言葉を語り、多くの行為を（なし）、以前よりももっと沢山の食事を食するのである。帝師は（それを）知って、料理人に問うた。「王の食事は以前よりどれ程多くなったか。また友よ、これが王の受用する飲み物や食べ物なのか」と。彼は「食事も水もずっと多くなりました」と答えた。帝師は¹⁷⁶「これは夜叉であり、王ではない」と知って、行ってビンドサーラと称する王子に告げて（王子よ¹⁷⁷）方法を普ねく求めて、この夜叉を倒しなさい」と（言った）。習慣によりこの宮殿内には、今何人たりとも武器を運ぶことは不可能であっ

た。王子は直ぐに二人の召使を連れてこさせて、「お前達二人は武器を携えて王宮の中庭に立ち、自ら刀を執ってそこで諍いをなせ」と言¹⁸⁰って、彼は夜叉王のところに行¹⁸¹った。夜叉王は彼等の諍いを聞いたが、（その内容は）知らなかった。「息子よ、この諍いをどう聞くか」と問うた。「王よ、実にこの二人の召使達は王宮の中庭に立¹⁸²って『君の武器ではない。私の武器だ』と諍っているのです。」「息子よ、今行って静かにさせなさい」と命じた。ビンドサーラはその時、行¹⁸³って外に出¹⁸⁴て行¹⁸⁵ったように見せかけ、また（部屋に）入¹⁸⁶って「王よ、私は諍いを鎮めることはできません」と（言¹⁸⁷った）。夜叉王は再度、王子に命じた。王子はそこに行¹⁸⁸って再び戻¹⁸⁹り（夜叉王に）告¹⁹⁰げた。「若し（彼等の）諍いを鎮めんするなら、王が鎮めるべきでありま¹⁹¹しょう。王よ、私はあなたのところ¹⁹²に二人の召使を連れて参¹⁹³りま¹⁹⁴しょうか」と。「王子よ、（若し彼等を）連れて来たなら、そ（の諍い）を鎮めるであ¹⁹⁵らう」と彼は同意した。（王子は）「しかし王よ、この宮殿内には何人たりとも武器を持ち込むことは出来ません。我々は¹⁹⁶どうすべきか今教えて下さい」と（言¹⁹⁷った）。「されば、汝は今空手の二人をわが下に連れて来なさい」と言¹⁹⁸った。（王子は）夜叉の言葉によって二人の召使を連れて来た。「如何なる理由で諍いをして¹⁹⁹いるのか」と、か（の夜叉）は問²⁰⁰うた。さてビンドゥサーラは夜叉王に告²⁰¹げて言うには「王よ、二人

の諍論は一振りの刀によるものだと言ふことです。『(この刀は)王より私が賜ったものだ』と、彼等は互いに言い合っているのです』と。(王は)「ならばその刀を持参せよ。わしが見れば分る」と。それでビンドゥサーラ大王は、刀を持ってこさせるやいなや、デーワガッバ夜叉王を両断にした。そして(その)身体を宮殿より除去させて火葬にした。都城を天の都と同じように莊嚴し、彼等はかのビンドゥサーラ王子を灌頂した。かの王は二十八年間統治した。その時、かの王のモーリヤ族出身の妃はシリダンマ (Siridhamma) と称し、福(相)ある美人であった。ところが彼女が懐妊するやこれ等の異常嗜好が起きた。彼女は一方の足を月によって飾りたいたか、また一方の(足)で太陽に近づきたいという欲が起きるが如きであり、また星の光りや黒雲の聚りや地中の蚯蚓を食したいというが如き欲を起した。また山腹の森の高き木々の若芽を(食したいというが)如きであった。この異常嗜好があまりにも極端であったので、他の人に告げることがはなかつた。また自らのその異常嗜好を鎮めることも不可能であった。次第に身体は萎み憔悴し醜悪に(なつていった)。「妃よ、何故このように汝は醜くなつたのか」と、か(の王)はその(身体の)変調を尋ねた。(妃は)「大王さま、私に得ることが出来ない欲望が生じたために、久しくあなたさまにそれを告げられなかつたのです」と。(王は)「私は凡ての聖な

るものを具備せる王族で大自在者である。完遂すべからざる何物も無いではないか。妃よ、信賴して話すがよい」と(言つた)。(このように)言われて、かの妃は彼に異常嗜好を告げた。王は彼女をなだめて、王宮より出て行つて、大臣達を召集して彼等にそのことを明かした。「ここにその方法がございます」と彼等は王に述べた。「月と太陽と同じ形をした食物をしつらえさせて、私どもはそれら他のものを(妃さまに召し上がらせましょう」と(言つて)、直ちに黄金色をした清浄な太陽の形のものゝと銀色をした月の形の食物をしつらえさせて、糖菓や硬き食物の種類などとり混ぜて、別々に雲などの色や形状をしたそれら四種の美味なる食物を種々にしつらえさせた。このように五色の菓子などによつて、小さな枝々と葉や若芽などによつて飾られた樹を作つた。さて凡ての王分を遍ねく浄めしめて、月や太陽の形をしたものがある山腹に据えさせた。そしてこの(作られた)月と太陽とをもつてきて、種々の装身具をもつて飾られた王妃を連れ出した。そして數物の孔隙から黄金色をしたものなど凡ての硬き食物をそこに置いて、そのようなものを次々に食べさせたところ、かの妃の異常嗜好は直ちに鎮まつた。王は(妃の)異常嗜好の結果を知ろうと欲して、バラモン達を集めさせて適当な供養をなさせて、彼は諸々の異常嗜好を尋ねた。「王よ、私達は星祭のことは知っておりますが、この異常嗜好の結果

については存じません」と彼等は王に述べた。(王は)「しか
らば確かに何人達が知っているのか」と問うたが、(彼等は)
「市の司財者達であります」と(言った)。彼等にそのように
問うと、(彼等は)「活命者(ajivaka)達であります」と言っ
た。彼はそこで彼等凡てを呼び、問うた。彼等の中にジャラ
サーナ(Jarasāna)と称する一人の王家が帰依している宗教
者がいたが、(彼は)「王よ、あなた様は、凡ての肢分が完全
な、福相を備えた、大自在者である御子息を得るでありまし
よう」と予言した。(彼は)詳細を語らんと欲して妃に近づ
き、大層高価なよく施設された席に坐して、「お妃よ、御
子息は大自在者となりましょう」と言った。「月や太陽に接
近するというのが如きその(異常嗜好は)、全ジャンブディ!
パの百人の王達が(彼の)侍者となることの福の前兆となる
でしょう。彼女の星を食したいということは何かと言え、
(御子息は)高貴なる彼等九十九人の異母の息子達を自ら、
その都城において殺害することの彼の前兆であり、彼女の雲
の聚りを食したい欲するが如きは、九十六の種々な異学達の
盲信する邪見を碎破し自ら永く優れたる正覚者の教えを策励
することの前兆であり、地中の蚯蚓を食したいと欲するのは
、地面下一由旬の深さまで、威光を及ぼすことの前兆となり
ましよう。彼女のヒマラヤの大樹を食せんと欲したことは虚
空一由旬の高さまでも威力を示さんとすることの前兆であり

ます。(故に)この諸欲の果を観察されよ」と言った。その
時、かのシリダンマー(妃)はその予言を聞いて満足し心悦
び、種々の供養をなし、「尊師よ、私はもし果が実現した時
には、あなた様を草菴より黄金の駕によりお迎えし、あなた
様に全財を差し上げましょう」と(言った)。彼女は苦行者
の名を直ちに金の器に刻せしめ、彼をその草菴に送らしめ
た。
(31) かくの如き大智慧の活命者は如何なる人物であろうか。そ
の昔、蛇²³²となって住処の近くに住していたと言う。カッサパ
(Kassapa) 仏の声聞の論師比丘達は常に会衆で学習をなし、
アディダルマと言うものが作られた時に、処分別(Ayatana-
vibhanga)に到達した。彼はそれ等の声を聞いて目覚め、大
いに喜び、人間の世界から死んで三十三天に昇天した。天
の恵みを享受し、天の寿量の時を過し、死歿してバラモン
の家に生まれて繁栄を経験したが、この如き諸欲における過
患を見て世俗を捨て、そこなる菴に出家したのであった。
アディダルマを聞いて彼は博慧者となった。胎児が生長して後
に、彼女はそのような言葉によって福相を具したる息子で
あることを知った。ある日王は高貴なる息子を取って、脇²³⁹
に坐らせて戯れつつ坐していた。王は右に巻いた螺貝を取
って、それから息子の手に持たせたが、その時息子は小便²⁴⁰
を放出した。(王は)螺貝によってそれを受けて、息子の頭

頂に注いだ。妃は、そのことを見て怒り、(王の)手からかの王子を取り上げて、そのことを彼女は王家の帰依する宗教者(のジャラサーナ)に話した。(彼は)「畏れることはありません。あなたの大いなる福德を有する比類なき息子は、全ジャンブディーパの最上の王となるでありますよ」(と言った)。運命²⁴³を授記し終って、ジャラサーナは退出した。王子が次第に生長しつづつあった時に、か(の王妃)はティッサ(Tissa)王子と称する他の王子を出産した。ビンドゥサーラの息子達は百一人いるであろうが、それ等の中でアソーカ(Asoka)は福德と威光と威力と神変とを有していた。彼は異母兄弟九十九人を殺害し、全ジャンブディーパを一王国とした。その以前にモーリヤ族系統にチャンダグッタと称する王に生まれたビンドゥサーラと言う息子は、パータリプッタ市において父の死後に次第に成長しつづつ、彼は後に王となった。かの王には二人の同腹の息子がいたが、彼等二人には他に九十九人の息子で、(アソーカ)王の異母兄弟がいた。王は彼等凡てのうち年上のアソーカ王子を、アワンテイ(Avanti)国の副王にした。さて一日王は自らの随侍の息子の行かざるのを見て「息子よ、汝の王国のウッジェーニ(Ujeni)の都に直ちに行きて住せよ」と命令した。彼は父の言葉によりウッジェーニに行った。旅の途中、彼はウィデーサ市において、デーワナーマカ(Devanāmaka)長者の

家に住まいを整えた。長者のこの娘を見て大いに喜び、こう思った。「もし幸運と愛情と可愛の相を備えたる息子を得るならば、この女性は私を喜ばせるだろう」と(言った)。か(の長者)により与えられた(娘)を得て、彼は彼女と共住を営んだ。彼女は懐妊して、ウッジェーニ市に導かれて、マヒンダ(Mahinda)と称する美しき王子を出産して、その後にはサンガミッタ(Saṅghamitta)と称する一人の王女を(生んだ)。ビンドゥサーラ(王)が死の床に臥していた時、自らの息子を憶って、都から連れて来させるべくウッジェーニ市に彼等大臣達を派遣した。彼等はそこより(ウッジェーニ)行きアソーカの師に告げた。彼等(大臣達)の言葉により、彼は(王の)下に急ぎ行った。その時途中、真直ぐにウエーディサ市に(行き)そこに息子と妻とを置いて、父の下に行きパータリプッタ市において、父の死の身体処理の務めを七日間善くなして、彼等九十九人の異母兄弟を殺害して自ら傘蓋を掲げて、その都城において自ら灌頂をなした。彼等の母は二人の王子を自らかの王の下に送り、自らはそのウエーディサ市に住した。

勝者²⁶⁴の入涅槃の後、彼の灌頂に至るまで二百十八年が経過している。大いなる名声を有する(アソーカ)王は、王国を一手に得て後四年、パータリプッタの都城において自ら灌頂式²⁶⁶をあげた。彼の灌頂直後(彼の)威力は常に虚空において

一由旬、地において一由旬(の深さ)に達した(という)。諸天²⁶⁷は毎日八担のアノータッタの水をもたらしたが、王は人々にそれ等を頒ち与えた。諸天は雪山(Himavat)からまた数千人の人の為に、ナーガラター(Nāgalata)と言う楊枝(木)をもたらした。(諸天は)そこからまた薬用のアマラカ(amala-ka)、同じくハリータカ(haritaka)を初め最上の色と香と味とを有するアンバパッカ(ambapakka)を(もたらし)、また風神(maru)達は五色の衣服、黄色の手巾布、六牙池

(Chaddantadaha)からは天界の飲料を(もたらし)、諸竜²⁷¹は竜の宮殿から縫い目の無いスマナ(sumana)華の布と天界の青蓮と塗薬とを(もたらし)鸚鵡²⁷²は日々六牙池から九万荷の米をもたらした。鼠²⁷³はこれ等の米を損うこともなく、殻の無い籾皮のない米粒として、それをもって王家の人々に食事が調えられた。蜜蜂²⁷⁴は常に蜜をかの(王の)ために調べ、熊達は鍛冶場において鋸を打った。カラウィーカ(karavika)鳥は心地良き甘美なる(さえずりの)声にてやって来て、かの王の為に妙音を発した、かのアソーカは灌頂をなし、テッサと称する同腹の子なる末弟を副王として灌頂した。

「法阿育(Dhammasoka)の灌頂」終る。

(阿育王の)父はバラモンの徒党なる六万のバラモン達に供養をなしたが、彼もまた彼等を三年間供養した。アソーカ²⁷⁸王は住処における彼等の喧騒を見て「審察(の上で)施物の

施与をなそう」と大臣達に指示した。賢明なる王は諸派の外道達を呼び出して、各別に審察し(食堂に)坐らせて食事を与えて後、放った。

時に(王宮の)窓辺に行き、街路を行く寂靜の行者ニグロダ(Nigrodha)沙弥を見て、彼は心に悦んだ。かの童子はビンドゥサーラの凡ての子等の最長兄スマナ(Sumana)王子の息子であった。アソーカはビンドゥサーラの病の時に、父より与えられたウッジェーニの王国を捨てて、プッパプラ(Pupphapura華(氏)城)に赴いた。父の死するや都城を自己の所有となし長兄を殺害して、優れたる都において王権を把握した。スマナ王子と同名の妃は、その時懐妊していたが、東門より外に出でて、チャンダーラ(Candala)村に至った。そこにニグロダ樹の神があり、彼女の名を呼び家を建てて与えた。その日に彼女は優れたる息子を産んで、諸天の保護を喜びその息子にニグロダと名づけた。チャンダーラの長は彼女を見て自らの妻の如く思い、七年の間善く彼女を世話した。その頃阿羅漢マハーワルナ(Mahavaruna)長老はこの王子の(阿羅漢の)機根の有るのを見て、母に問うて出家させたが、彼は剃髮堂において阿羅漢果に到達した。それより彼は母の妃を見んがために出て行きつつ、南門より優れたる都に入り、その村に行く道を行き、偶々王庭を通り過ぎた。(彼の)寂靜なる威儀によりかの王は心悦び、

前世に共に住みたるによって(心に)悦びを生じた。

伝えによると、昔三人の兄弟の蜜商人があり、一人は蜜を

売り、(他の)二人は蜜を採取してきた。一人の辟支仏(Pa-

cekabuddha)が腫物の病に苦しんでいた。そのために他の

辟支仏は蜜を欲して、托鉢の行法により都城に入った。その

時浅瀬に水を得るために行きつつある一人の婢が彼を見た。

そして尋ねて蜜を欲していることを知り、手によって指し示

して「尊師よ、あれは蜜(を売る)店です。あそこにおいて

なさい」と言った。辟支仏はそこに行き店に立った。かの浄

信を有する商人は、かの辟支仏に口から溢れるほどに鉢一杯

の蜜を与えた。(鉢に)充ちたのと盛り上ったのと大地に溢

れ落ちた蜜とを見て、彼は喜んでこのように願った。「(こ

の)布施により、私にジャンブディーパにおいて主権を一手

に得さしめよ。虚空一由旬地下一由旬の間に威力は(及ぶべ

きなり)」と。(二人の)兄弟等が帰って来た時彼は言った。

「このような人に私は蜜を与えました。あなた達もこれを随

喜して下さい。何故なら(これは)あなた達の蜜であります

から」と。かの長兄は喜ばず「彼はチャンダーラ(candāla)

旃陀羅であったかも知れない。何故ならチャンダーラ達は常

に黄衣を着ているから」と言った。仲兄は「その辟支仏を大

海の向う岸に投げよ」と(言った)。しかし彼の布施の利得

についての語を聞いて、彼等もまた。(蜜を売る)店を指し

示した(婢は)、立ちてそこに行きたる仙人を見て丁重に挨拶

して「尊師、如何でした。あなた様は蜜を手に入れられま

したか」と。「得ることが出来ました。あなたの希求するの

は何であるか」と彼が言った時、かくかくであると言って、

彼女は彼(アソーカ)の王妃となることを、関節の見えない

極めて美わしき容姿が得られることを望んだ。アソーカ(王)

は蜜を与えたものであり、アサンディミッター妃は婢であ

り、チャンダーラと言ったのはニグローダであり、ティッサ

は海の向う岸へと行ったものである。チャンダーラと言った

ものはチャンダーラ村に生まれたが、しかし彼は解脱を求

め、七年にして解脱を得た。

かの王は、かの(ニグローダに)親愛の情を起し、急ぎ彼

を呼ばしめたが、彼は寂然たる態度で入って来た。王は「兄

弟よ、適する座に坐りなさい」と言った。彼は他に比丘を見

ず、師子座に近づいた。彼が王座に近づいた時、王はこのよ

うに思った。「今日、この沙弥は我が家の主となるであろう」

と。彼は王の手に縋って王座に上り、白き傘蓋の下の王座に

坐った。時にアソーカ大王は、彼がそこに坐ったのを見て、

徳により尊敬し、時に大いに喜んだ。(王は)自分のために

調べられた硬軟の食物によって饗応し、正覚者の説き給うた

法をか沙弥に問うた。かの沙弥はか(の王)に不放逸品

(Appamādaṅga)を説いた。それを聞いてかの王は、勝

者の教えに信仰を得、「兄弟よ、私は汝に八人分の常施食を与えるであろう」と言った。彼は「王よ、私はそれらを和尚に供するであります」と言った。また八(人の食)の施された時、彼はそれらを阿闍梨(acariya)に与えた。更にまた八(人の食)が与えられた時、彼はそれらを比丘僧伽に与えた。次にまた八(人の食)の与えられた時、覚慧ある人は(初めて自ら受けることを)諾し、三十二人の比丘を伴って第二日(王宮に)行き、王の手づから供養をし、(彼は)王に法を説き、多くの人々も共に(三)帰と(五)戒とに確立せしめた」と。

ニグローダ沙弥の会見終る。

註

- (1) 第十四偈から第十六偈の前半の部分は Mhv. の第五章十四偈に相当するが、大史では Kalāsokassa puttā tu ahesuñ dasa bhātukā……とのみ記し、十人兄弟の具名は記載しない。Mhv. Tikā にもその箇所は彼等の名は註釈書に説かれるとのみ記述している(Tesam pana nāman Aṭṭhakathāyañ vuttan.)° cf. Mhv. Tikā p. 177-26 。
- (2) 十六偈後半から十八偈までは Mhv. Tikāp. 178-10~60 までの事柄と類似の内容である。
- (3) 十九偈より二十四偈までの部分は Mhv. Tikā p. 178-70~150. までの記述内容と殆んど同じである。
- (4) 二十五偈と二十六偈前半の記述内容は Mhv. Tikā p.

178-150~190 までの記述内容と同趣のものである。

- (5) 二十六偈後半より二十九偈までは Mhv. Tikā p. 178-200~220 の内容と類似している。
- (6) 二十九偈後半より三十偈前半の内容は Mhv. Tikā p. 178-220~240 の記述と類似のものである。
- (7) 三十偈後半より三十三偈までの記述内容は Mhv. Tikā p. 178-240~p. 179-50 までの内容と同趣のもの。
- (8) 三十四偈は Mhv. Tikā p. 179-50~70 記述内容と類似している。
- (9) 三十五偈より三十六偈までの記述は Mhv. Tikā p. 179-80~100 の内容と殆んど同じである。
- (10) 三十七偈の記述は Mhv. Tikā p. 179-100~120 と内容的には殆んど同じである。
- (11) 三十八偈と三十九偈の記載する内容は Mhv. Tikā p. 179-120~150 の内容と殆んど同じである。
- (12) 四十偈から四十四偈までの記述する事柄は Mhv. Tikā p. 179-150~210 に記載する内容と類似のものである。
- (13) Kalāsoka 王の息子の名として Mahābodhivansa が Bhaddasena 以下九王の名を記載している。(Kalāsokana-rapatisūnavo Bhaddaseno Korāṇḍavaṇṇo Maṅguro Sabbhañjāho Jāṭiko Ubhako Sañjāyo Korabyo Nandivaddhano Pañcamako ti dasa bhāturājāno ahesuñ. Mahābodhi-V. p. 98-60~)
- (14) Nanda 王以後の九人の王名はテキストにより一部異なる。Mahābodhivansa の記載する王名は「Uggasena-

nando Paṇḍukanando Paṇḍugatinando Bhūtapālanando
Ratthapālanando Govisānakanando Dasasiddhakanando
Kevattanando Dhananando ti nava nandarājāno ahe-
suth」^{とある} Cambodian Mhv. ^{に見え} Kanakananda,
Candaguttikananda の二王の名は無く、それにかわって
Paṇḍukananda, Paṇḍugatinanda の二王の名が記載され
ている。(cf. Mahābodhiyaṃsa p. 98)

(15) 五十二偈より五十九偈に至る記述は、ナンダ王朝の最後の
王 Dhanananda の名の由来について記述している。その内
容は、Mhv. Tikā p. 179-270~p. 180-100^とおいて記載され
る内容と殆んど同じ趣旨のストーリーである。

(16) 六十偈以下は、Moriya 朝の開祖 Candagutta と彼を育
て補佐したバラモン Cānakkā に纏わるストーリーが語られ
るが、同趣の物語は Mhv. Tikā p. 180-160~p. 187 におい
て記述されるからこれが下敷となっていることは明白であ
る。「大史」では以下の二偈について記述されている。即ち、
16. Moriyānaṃ khattiyānaṃ vamsajātāṃ siridharāṃ
Candagutto ti paññātāṃ Cānakkō brāhmaṇo tato
17. navamaṃ Dhananandam taṃ ghāteṭvā caṇḍakod-
havā sakale Jambudīpasmiṃ rajje samabhisin-
so.

また Mahābodhiyaṃsa. p. 98 に簡略して「Tato Vidūḍa-
bhasaṅgāme Kapilavathuto nikkhanta Sakyaputtehi
māpīte Moriyānagare Narindakulasambhavo Canda-
guttakumāro Cānakkadvija patissamussāhito Pātali-
pu-

te rājā ahoṣi.」とのみ記述されている。

六十偈から六十二偈までは Mhv. Tikā p. 181-120~170 の記
述内容と同趣で先ずチャーナッカの生い立ちが語られる。

(17) 六十三偈より六十八偈に述べられる内容は Mhv. Tikā p.
181-170~250 に述べられる内容と殆んど同じである。チャー
ナッカは、自ら福德の相で、王者となる相と予言された歯牙
を打ち毀き、母の下に止まる。

(18) 六十九偈より七十六偈前半までは、Mhv. Tikā p. 181-
300~p. 182-70 に記述される内容と類似し、チャーナッカは
ダナナンダ王がプッパプラ市にて営む大施に出掛け、上位の
バラモンの坐すべき席に就き、王の不興をかうに至るストー
リーが記載される。

(19) 七十七偈より八十二偈前半の偈と、Mhv. Tikā p. 182-
140.~300. に記述される話の筋は同趣のもので、それを偈の
形式にしたものである。

(20) 八十二偈後半から八十四偈までの内容は、Mhv. Tikā p.
182-310.~p. 183-20. に記述されるストーリーを偈のスタイ
ルに直して述べたものである。

(21) 八十五偈より九十四偈に記述される内容は、Mhv. Tikā
p. 183-40~200. に記述されるストーリーに相当し、チャーナ
ッカがダナナンダ王の息子を連れ出し教育して、ダナナンダ
王の政権を覆えし後継者の座にすえんとしたが、その資質な
しと見て他に適当なる人物を捜さんとするに至る経緯を述べ
ている。

(22) 九十五偈より一〇〇偈までは釈尊在世中、隣国のウイダウ

ーダン (Vidūḍabha) 王に釈迦族が滅ぼされたが、一群のサーキヤ族が逃れてヒマラヤ地方に移動し、そこにモーリヤナガラという美しい城市を構築したと言ひ伝説が語られる。

Mhv. Tikā p. 180-184~304. (Te hi pana dharamāne yeva Bhagavati Vidūḍabhena upaddutā keci Sākiyā Himavantān pavisitvā aññatarān salāsavasampannam ussanappipalivanādi pādapavanehi upasobhitān ramaniyān bhūmibhāgān disvā tathābhiniyitthape-mahadayā tasmih thāne suvibhattamahāpathadvāra-kotthakaṇ thirapākāraparikhāparikkhitān āramay-yānādi vividharāmaṇeyasampannān nagaravarān māpesuṇ. Api ca, taṇ mayūragivasanākāsa-chadani-tthakapāsādapantikaṇ ca mayūrakekēkānādehi pūritān ugghositaṇ ca ahosi.) の如き記述がなされている。

- (23) 一〇七偈より一〇七偈前半までは、ある時この市の王が近隣の王により殺害されたためその妻は懐妊していたが、逃れてブッパプラに至り、子を産み牛舎の前に捨てた。牛たちにより踏みつけられ殺されようとした時、牡牛チャンダにより護られて生命を得、牛飼いににより養育された。牛飼いは牡牛チャンダにより護られたためにチャンダグッタ (Candagutta) と命名した由来を述べる。(cf. Mhv. Tikā p. 183-214 ~p. 184-34.)

- (24) 一〇七偈後半より一二五偈前半までは、チャンダグッタ王子が牛飼いとるところから獵師の息子のところに貰われ、次第に王者となるべき才覚を、子供達の遊びの中でも現わすよ

うになる。たまたま王者となるべき資質を具えた人物を捜し求めていたバラモンチャーナツカの目にとまり、チャーナツカに引き取られ教育を受けることになる経過が記述されている。(cf. Mhv. Tikā p. 184-54 ~p. 184-304.)

- (25) 一二五偈後半より一三四偈までは、チャーナツカバラモンに引き取られたチャンダグッタ王子が次第に王者となるべき智慧と決断とを示すようになり、それと比較しダナンダの息子パッタ王子の資質の劣えが目立つようになる次第を記述している。この部分は、Mhv. Tikā p. 184-304 ~p. 185-174. に述べられる内容と類似している。

- (26) 一三五偈より一五一偈までに述べられる内容は、チャーナツカの補弼を受けてチャンダグッタは次第に周辺諸地域を手中に収め、やがてパータリプッタ市に侵入してダナンダ王を倒し、遂に王権を獲得するに至る経緯が語られる。この部分は Mhv. Tikā p. 185-174 ~p. 186-194. の中で述べられる内容に相当する。

- (27) 一五二偈より一五七偈に至る内容は、Mhv. Tikā p. 186-194 ~p. 187-94. に述べられる内容と同趣のものである。一五六偈は、Mhv. V. 18 So catuvisati vassāni rājā rajjān akārayi, の部分に相当する。

- (28) 一五九偈から一七一偈前半に至る偈では、懐妊中のチャンダグッタの妃が毒薬入りの食事を摂ったのを見て、チャーナツカバラモンは胎児を妃の胎内から切り開いて取り出し牝山羊の胎内に移し、その七日後に息子が生まれたが、山羊の血が身体に付着していたのでビンドゥッサーラ (Bindusāra) なる名

が与えられたと言う伝説を伝える。この箇所は Mhv. Tikā p. 187-190~p.188-140. に記述される内容と趣旨は同じである。

- (29) 一七一偈後半から一九二前半に至る偈は、チャンドグッタ王の死後、その身体に夜叉 Devagabha が宿り、王の如く振るまい周囲を悩ます。王の師はそれは真実の王ではなく、夜叉の仕業なることを見抜く。ビンドゥッサーラは一計を案じ、夜叉の取り付いたチャンドグッタ王の身体を両断にして、夜叉を殺しその身体を火葬に付してやがて正規の王位に就くまでの伝説を記述する。 Mhv. Tikā p. 188-150~p. 189-21. の中に、同様の伝説が記載されている。

- (30) 一九二偈後半から二二二偈前半に至る説話は、ビンドゥッサーラ王が灌頂し、王位に就いた後、妃の Siridhamma が懐妊する。その時以来、妊娠による異常嗜好の数々が現われ、本人及び周囲の者が困惑する。これを占わせるべくアーシーヴィカのジャラサーナ (Mhv. Tikā では Janasāna とする) を呼び、聴聞する。ジャラサーナは、異常嗜好の一々を生まれる王子の将来の前兆と関連づけて説明する。生まれる王子 (アソーカ) は、全ジャンブデーパの支配者となること、上は空中一由旬の高さまで、下は地下一由旬の深さまで、その威光は及ぶであろうと予言する。王妃は、それが真実となった暁には、全財を布施しようとする。このストーリーは Mhv. Tikā p. 189-250~p.192-70. に至る記述と殆んど内容は同じである。

- (31) 二二二後半から二二七偈前半までの偈では、アーシーヴィ

カのジャラサーナの前身譚が語られる。この箇所に相当する部分は Mhv. Tikā p. 191-50~140. の記述にある。

- (32) 二三八後半~二二九偈前半は Mhv. Tikā p. 192-80~90. 二二九後半から二四〇偈までは Mhv. Tikā p. 192-100~120. まで、二四一偈は Mhv. Tikā p. 192-120~140. まで、二四二偈は Mhv. Tikā p. 192-141~151.、二四三偈は Mhv. Tikā p. 193-140~170.、二四五偈は Mhv. Tikā p. 193-211~270. の箇所の記述に夫々類似している。

- (33) 二四六偈以下二七六偈は、モーリヤ族の王統をチャンドグッタより始めビンドゥッサーラの息子のアソーカ、と同腹の弟テイッサ及び王女サンガミッタについて記述する。アソーカは他の異母兄弟九十九人を殺害し父の死後やがて王位に就き、パータリプッタでの灌頂に至るまでを説く。これに関連して Mahābodhiyaṃsa p. 98 には次の如く記している。

Tassa putto Bindusāro nāma pituaccayena rājā hutvā
ekasataputtakānaṃ janako ahoṣi. Tesu Moriyavaṃ-
sajāya Dhammādeviyā Asoka-Tissābhiddhānānaṃ dvi-
nnaṃ puttānaṃ majjhe jeṭṭho Asokakumāro Avanti-
rattahaṃ bhujjāti, pitarā pesito Pātaliputtato paññā-
sayojanamattḥake Viḍḍābha bhayāgatānaṃ Sākya-
naṃ āvāsam Vedisaṃ nāma nagaram patvā, tattha
surayuvatnibbisessaṃ Vedisaṃ Sakya kumārīkam
ādāya Ujjenrājadhāniyā rajjaṃ karanto, Mahindāb-
hiddhānaṃ sakalalokasivaṅkarantaṃ kumāraṃ ca Saṅgha-
mittābhiddhāniṃ lokānandakaraṃ kumārīkaṃ ca lab-

hitvā, tesam mukhaphadumavanāva lokanasukham
anubhavanto pituno gilānabhāvaṃ sutvā, siggham
Pāṭaliputtam upagantvā pitucaraṇapāricariyaṃ katvā
tassāvāsāne rajjam aggaheṣi.

- (34) 二六四偈は Mhv. V, 21 に相当する。ここで仏滅二一八年にアソーカ王が即位したことが記述されている。勿論これは南方仏教の伝承によるものであり、アソーカ王の即位が仏滅年代の決定に深く関係するところから、北方伝を採用する我が国の研究達によって、南方伝は批判され受入れられないことは周知の通りである。宇井伯寿「印度哲学研究」(二)甲子社書房一九二七年、最近では平川彰「インド仏教史」(上巻)春秋社一九七四年及び干瀉竜祥「インド仏教重要事項年代考」(鈴木学術財団研究年報一九七五年・七六年)等々。

アソーカ王の灌頂より説き始め、遡及して、彼がウツジェーニの副王であった時分、ウェーデイサの城市でデーヴィーと言う長者の娘と同棲し、その後マヒンダとサンガミッタ等の子を得たこと、及び仏教への帰依、第三結集に至る経緯は Dpv. VI~VII に述べられている。

二六四偈より二九五偈までは「大史」五章二十一偈より五十二偈までと殆んど同文である。

- (35) 二九六偈は変則的に三行詩となっており、一行目「Pacc-ekabuddho gantvāna āpāne tattha tīṭhāti.」は「大史」中には無い。

以下二九六偈二行目より三〇一偈までは Mhv. V 53-58 と

[Extended (or Cambodian) Mahāvamsa] 訳註(五)(福田)

同文である。

- (36) 三〇二偈~三〇三偈に相当すべき偈は Mhv. V 59 であるが、内容的には共通するもの。ここで二偈に分けて、多少表現を変えて述べている。

三〇三偈は変則的な三行詩となっている。

以下三〇四偈から三一六偈までは Mhv. V 60-72 と同文となっている。

(註(28)の追記)

エリアーアの『生と再生』の英雄とシャーマンのイニシエーションによると、古代社会のイニシエーションの儀礼において、山羊の血を以って清めるということが一般的であったと言う。してみるとピンドゥサーラの山羊の胎内より生まれ、山羊の血が身体に付着していたと言う英雄伝説はこの宗教的儀礼を象徴的に現わしたものと考えられる。(M・エリアーア・堀一郎訳『生と再生』イニシエーションの宗教的意義』第五章英雄とシャーマンのイニシエーション。)